陳舜臣さんと
神戸を歩こう

Ｐａｒｔ　２

陳舜臣さんを語る会

6 三越神戸店　元町通すずらん燈　戦災にも焼け残った装甲ビル

【三越のショーウィンドゥから消えた赤い靴】

私の記憶は元町七丁目から始まる。あるいはここが私の生家かもしれない。いまはもう道路になっている。旧三越百貨店のならびの家で、むかいは酒造会社の倉庫であった。

近いので三越にはよく遊びに行った。一階のショーウィンドゥに赤い子供靴が飾ってあり、それを母にねだると、私の足よりだいぶサイズが大きいので、もうすこしたってから買ってやるということだった。子供心にも誰かが買ってしまえばなくなるじゃないかと心配して、毎日のようにたしかめに行った。ところがその赤い靴が忽然と消えて…。（『道半ば』p.13、14）

▲往来華やかなる三越附近（絵葉書資料館蔵）
元町通西入口に店を構えていた。三越前に市電が見える。三越の開業は1926年。

【元町通のすずらん燈】

東京あたりでは、神戸といえば年配の人はすぐに元町のショッピングを連想するようだ。それほど神戸のモトマチは、ほかの土地の人にも親しまれている。

東の一丁目から西の六丁目にいたるまで、鈴蘭型に電燈をいくつもぶらさげた燈柱がならび、雨の日などは、とくに風情があった。元町情緒のなかで、雨の日が最高だったのではあるまいか。雨に濡れた歩道のうえに、燈火の影が映って、それが思い思いにゆがんでいた。

しかしいまはそんな風情もなくなった。戦災後、鈴蘭燈はついに復活しなかった。しかも元町は、もう雨に濡れることもなくなった。アーケードがすっぽり歩道のうえにかぶせられたのだ。(のじぎく文庫『神戸ものがたり』p.143、144)

◀昭和初期の元町通（神戸市立博物館所蔵）

田井玲子著『外国人居留地と神戸』（2013 神戸新聞総合出版センター）は「雨の元町　すずらん燈　濡れて光った　アスファルト　…」の歌詞で始まる「神戸行進曲」（土屋健作詞・中山晋平作曲）を紹介している。

【戦災にも焼け残った装甲ビル】

空襲で五丁目の我が家も仁記も灰燼（かいじん）に帰した。三丁目の「新瑞興（しんずいこう）」だけは焼け残った。これはただの幸運ではない。やはり福建系の有力商館であった新瑞興は、私が生まれた年、大正十三年ごろに新しい店舗を建てはじめたのである。前の年に関東大震災があり、店主の周さんは、どんな大地震にも耐えられるように、鉄筋三階建の建物を、まるで地面に匍（は）いつくばるかんじに設計し、柱などもやたらに多くつくった。地震に備えたのが、空襲にも有効であったのだ。私たちは装甲ビルと呼んでいたが、コンクリートも必要以上にぶ厚かった。

戦後、周さんはもはやこの怪物のような店で商売をしなくなった。電報のやりとりでできる繊維がメインラインだったので、山手の自宅でも、けっこう商売ができたのである。この新瑞興の御曹司の周達生君は、商売をやらないで、民族博物館の助教授になり、学者の道にはいった。（『曼陀羅の山』「青雲の軸 雑談」）

■「新瑞興」が使用しなくなり、岸本産業株式会社(現社名：ＫＩＳＣＯ株式会社)に譲渡。

旧「新瑞興」ビルの現状（栄町通３丁目）

7　トア・ホテル　須磨寺に立つ子規の句碑と陳さんの詩碑

【図画の時間、屋上から描いたトア・ホテル】

小学生のころ、図画の時間に、よく屋上で写生をさせられた。私が通っていた神戸小学校は、ちょうど県庁の前にあり…。

私たちの図画の先生は、のちに作家になって、その道でも私の先輩になった若杉慧氏であった。

南にむかって海を描くとき、かならずいれなければならないのは、川崎造船所のガントリ・クレーンで…。北にむかって山を描くとき、かならず画用紙のどこかに描かねばならなかったのは、トア・ホテルであった。

はげしい空襲にもかかわらず、木造のトア・ホテルが焼失を免れたのは、奇跡といってよかった。戦後、そこはアメリカ軍将兵の宿舎となった。誰かが酔っ払って、ストーブを蹴とばしたのであろう。戦後まもなく、失火でその優美な姿を消した。　（『含笑花の木』「神戸の魅力」）

◀トア・ホテル（絵葉書資料館蔵）

▼「県庁前の神戸小学校」の敷地は、今は神戸市立生田中学校になっており、北西隅、フェンス沿いにある「神戸小学校発祥の地」碑が当時を物語っている。碑の下半分は、若杉慧作詞の校歌。

【須磨寺に立つ子規の句碑と陳さんの詩碑】

嬉しさに涼しさに須磨の恋しさに
— 正岡子規

明治28年５月、従軍記者として大陸へ渡った正岡子規が、帰国船中で喀血し、神戸病院にかつぎこまれた。７月には須磨保養院にはいった。

須磨寺境内に、子規の句碑がある。

暁や白帆すぎゆく蚊帳の外

これは子規自筆のものである。

戦後、鉢伏山にも、

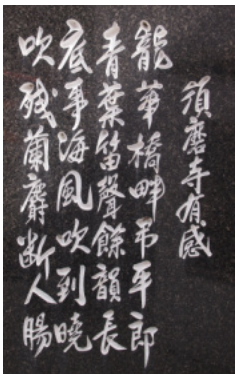
月を思ひ人を思ひて須磨にあり
ことづてよ須磨の浦わに昼寝すと

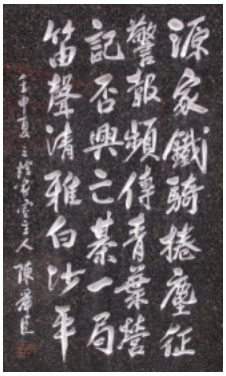
の二句を刻んだ句碑が建った。

（『神戸ものがたり』「二つの海」）

須磨寺に立つ子規の句碑
暁や白帆すぎゆく
蚊帳の外

龍華（りゅうげ）橋畔、右の二つが陳さんの詩碑（現在）





陳舜臣さんが須磨寺を訪れたときに作った七言絶句二首の碑が須磨寺に立っている。

一九九三年の除幕式当時の雰囲気が残る詩碑周辺（二〇一五年撮影）

（『神戸わがふるさと』「須磨寺と私」及び「あとがき」）

8 『枯草の根』『三色の家』ほか"陶展文もの"の舞台

陳舜臣さんは1961年、『枯草の根』で江戸川乱歩賞を受賞し、作家のスタートを切りました。ご存知のとおり、この作品は、素人探偵・陶展文が活躍する推理小説で、以後、同じ主人公が登場する小説が10作あり、“陶展文もの”と呼ばれています。“陶展文もの”を集めてみました。

《1．『枯草の根』に描かれた陶展文、及び「桃源亭」》

『枯草の根』の舞台は当時の神戸で、主人公陶展文は50歳です。

『枯草の根』に描かれた陶展文と弟分・朱漢生	
陶展文	事件の謎解明に挑む素人探偵、主人公。神戸の海岸通り、東南ビルの地階にある中華料理店「桃源亭」の店主兼料理人。中国は陝西生まれの福建育ち。日本に留学、東京の高校、大学を卒業。数年間の帰国を挟み、20数年、日本に居つく。妻・節子、娘・羽容の三人家族。世間からは漢方医としても認められている。父親譲りの拳法が得意。「桃源亭」を主たる生活の場としているが北野町1丁目に居宅をもつ
朱漢生	安記公司(あんきコンス)の主人。陶展文の弟分のような存在。展文の象棋相手

陶展文の店、「桃源亭」が入る東南ビルは、「商船三井ビル」がモデルと思われます。陳さんはこのビルに、思い入れがあるようで、『枯草の根』(集英社文庫版p.23)では、

六階建の東南ビルは戦前の建物で、最近にわかに林立した周囲の新築ビルにくらべると、どうしても色あせたうば桜の感を免れない。

と表現していますが、『虹の舞台』(徳間文庫版p.5、6)では、

神戸・海岸通の東南ビルは、昭和初期に建てられたという。…。いくら背伸びをしてみても、高さでは最近のノッポビルにかないっこない。風格である。駆けだしの新ビルは、いくら工夫をこらしても、風格が出るわけはない。やはり四十年の歳月に磨かれて、しぜんににじみ出るのがほんものなのだ。

と、愛着を込めて描いています。

《2．北野町の居宅からの景色》

高台から見下ろす神戸の夜景は格別だった。しかし陶展文は、涼み台に腰をおろして、さきほどからしきりに、「くだらん！愚劣きわまる！」と憤慨していた。客の朱漢生がきいてみると、どうやら新聞会館の壁に、富士山が大きく描かれているのが、陶展文のお気に召さぬらしい。「このすばらしい神戸の夜を、あの人工のばかでっかい絵がぜんぜん台なしにしているじゃないか。ご丁寧に照明までつけ

神戸新聞会館 富士山の夜景
神戸アーカイブ写真館提供

（上掲『枯草の根』収録「ひきずった縄」）

《3．陶展文もの10作》

"陶展文もの"10作を初出年順に並べてみました。右の表、丸印番号は長編、7は中編で他は短編、＊印は書き下ろしです。

ところで、舞台ですが、長・中編のすべて、及び短編『くたびれた縄』は神戸が主たる舞台になっています。その他の短編ですが、中国・天津の殺人事件に話が飛んだり、瀬戸内の小島や長崎の五島が舞台になったりとまちまちです。ご一読を。

陶展文登場作品一覧

	題
①	＊ 枯草の根
②	＊ 三色の家
3	くたびれた縄
4	ひきずった縄
5	縄の繃帯
⑥	＊ 割れる
7	崩れた直線
⑧	虹の舞台
9	軌跡は消えず
10	王直の財宝

現在の商船三井ビル（中央）
2027閉館予定

台湾TVドラマ『憤怒的菩薩(怒りの菩薩)』の一シーン
原作には登場しない陶展文がドラマでは主役

9『他人の鍵』、及び『南十字星を埋めろ』「隣りはなにを」の舞台 北野町

【神戸の山手北野町】

神戸の北野町は、三本松下不動坂あたりを東の極として、西はトーア・ロードを登りつめたところで終っている。

トーア・ロードは、神戸の中心部を大きく南北に貫いている道路である。

移住斡旋所のすこし東寄りの山麓から、一直線にメリケン波止場へ抜ける道路のうち、大丸百貨店以北がトーア・ロードと呼ばれる。正式の町名はすべて東西に、つまり神戸的にいえば横へならんで名づけられている。だから、南北、つまり縦の道路であるトーア・ロードは、断面図のように、いろんな町の一部を含んでいるわけだ。南から北へ、三宮町、北長狭通、下山手通、山本通、中山手通、そして最北層が北野町である。

不動坂とトーア・ロードにはさまれた山麓が北野町であり、神戸中心部の山手といえよう。この絶好の住宅地域は、主として在留外人によって拓かれた。いまでも、住民の大半が外国人である。（徳間文庫版『南十字星を埋めろ』「隣りはなにを」p.309）

『神戸というまち』より転載 一部加筆

【アジール(避難所)としての海港都市神戸】
2022年3月12日神戸新聞(夕刊)より抜粋引用

60年代に書かれた陳舜臣『他人の鍵』には、かつてこの地域に少なくなかった貧しい外国人家族が登場する。北野天神下の「外人長屋」で、白系ロシア人の母に育てられた若い女性・清原織雅(おりが)は、日本人の豪商の愛人になって戦時下を生き延びるが、戦後、自身の運命を開くために進駐軍の青年を誘惑し、邪魔になった豪商を殺すためにその邸に忍び込む。

小説は「外人長屋」に住む織雅の幼なじみたちの視点を通して進行する。広東料理のコックの息子、ポルトガル人ピアノ教師の息子、ラシャの行商をしているトルコタタール人一家の兄妹、そして管理人である五島出身の単身女性の息子。ルーツの異なる幼なじみたちは「自分たちがまわりから支えられずに、浮き上がった存在である」と感じつつ、ぎこちない神戸弁を駆使して生きている。

「他人の鍵」は観光地に変貌する以前の北野を舞台に、移民2世の青春の陰翳を印象深く描き出しているのである。（神戸大人文学研究科教授 樋口大祐）

「外人長屋」の面影を残す仏蘭西館
(於：北野町 編集委員撮影)

「外人長屋」住人

	西	中	東
二階	ポルトガル人ピアノ教師(アルナルド・モッタ)と息子マルスケ(マルセリーノ・モッタ)	終戦後に入居した白系ロシア人家族。老夫婦と30歳に近い息子、その妹	ラシャの行商をしているトルコタタール人と息子アリー・バヤル、その妹ファティマ
一階	広東料理コック夫婦と息子張彰仁、その弟、妹、居候の彭増嘉	管理人友島あき子と息子隆夫	清原織雅 この部屋で生まれる

(編集委員作成)

10 『凍った波紋』の舞台、山本通周辺は陳さん熟知の生活圏

『凍った波紋』あらすじ

再度山ドライブ・ウェイ入口で、盗み撮り専門のカメラマンが墜落死し、県警の警部が捜査に乗りだす。続いてカメラマンの友人が琵琶湖畔、淡水真珠の養殖水槽で怪死する。二人とも戦時中、中国で特務工作に従事していたことを知り、警部は背後関係を洗う。真珠と特務工作という光と闇を舞台に歴史に弄ばれた者の宿命を描く。

『凍った波紋』の舞台は、陳舜臣さん熟知の生活圏

抜粋引用します。

真珠商は選別や加工の場所が必要なので、彼らはおもに住宅地域である山手方面に、かなり大きな店を構えている。

神戸の山本通にあるフカミ・パールは、三階建、ブルー・タイルの建物で、一階が事務所、二階が加工場、三階は店員の寝泊りする場所となっている。庭をへだてて、雪をかぶったように白い、瀟洒な建物があり、それが社長の家族の住宅なのだ。

山本通四丁目に移住センターがある。戦前は国立海外移民収容所といって、南米への集団移民を出港までここに収容して、現地事情などの講習をした。戦時中は…。

戦後は移住斡旋所となり、さらに移住センターと名をかえた。

「海外移住と文化の交流センター」

石川達三の『蒼氓』に、…。

その移住センターの西はしから、再度山ドライブ・ウェイが山にむかってのびている。車で二分そこそこ行くと、『閣道深』という額をかかげたトンネルにさしかかる。トンネルの入口の北側に階段があって、そこを登ったところが『太子の森』なのだ。

（徳間文庫版 p.9、10、19）

■陳舜臣さんは、一九六五年から五年ほど、移住センターの近く、山本通四丁目に住んでいました。陳さん宅のすぐ西には、村田真珠の社屋がありました。といって、村田真珠がフカミ・パールのモデルなのかどうかはわかりません。また、当時、再度山ドライブ・ウェイのトンネル入口横から山に入り、太子の森を抜けて再度山に登るのが陳さんの日課になっていました。

そんな風に、小説の舞台は、陳さんにとって、勝手知った生活圏だったのです。

◀再度山ドライブ・ウェイ入口
トンネルの上、白い矢印「深道閣」
右の白い矢印を登ると太子の森
右手、坂を上ると追谷墓地

真珠の選別には「六甲山に反射した柔らかな北光線」が最適

『神戸真珠物語』（二〇〇九年ジュンク堂書店）より抜粋引用

真珠業者が集まってきたのには神戸の地形・風土が大きく関係している。自然が生み出す真珠には、当然のことながら、良質なものもあれば、そうでないものもある。大きさや色合いにも微妙な違いがある。その、言葉では表現し尽くせない色合い照りの具合、真珠層の巻き等を選別するのに、神戸の風土は適していた。

直射日光だと、天候によって明暗の差が激しいために選別がしにくい。その点、神戸は六甲山に反射した柔らかな北光線を安定して得られるという利点を持っている。それに加えて、北野町あたりは東西に伸びている地形から、真珠の加工業者が北窓のある作業場を設けやすかった。

今日でも百社を超える真珠業者がこの界隈に事務所を持ち、「パールストリート」の名で呼ばれる等、パールシティー神戸の中心になっている。